

「ミニトマト栽培」

暮らし
ポイント

「部屋で苗と出会う・一本ずつ植える」

3歳児 I 期

安心
充実
“いま”を
充実

保育エピソード

ミニトマトの苗を見せて「これなんだと思う?」と聞くと、子供たちは「葉っぱ!」と元気に答えた。「食べられるものが出来るよ」と伝えると、子供たちは葉っぱを触り、匂いを嗅ぎ始めた。「くさい」と笑っていた子供も「トマトの匂いがする!」と言う友達の声聞いて、真剣に匂いを嗅ぎだした。苗についていた緑の小さい実を見つけて「トマトだ!」と気が付いた子供もいた。それを聞いて「どこ?」とトマトを探し、同じ実を見つけてもトマトだとわからない子供もいて「赤くないよ…」と不思議そうに見つめていた。子供たちが苗との出会いを十分味わったところで「大きくなったらトマトがなるから、みんなで育てよう」と伝え、みんなで苗をプランターに植え替えた。

翌日、外に出た子供たちは苗の所に行き、食い入るように見た後、近くに置いておいたじょうろで水やりを始めていた。「トマトないねん」「赤くないで」と、教師に話をしながら水やりをする子供たち。水やりに満足するとそれぞれのしたい遊びに出かけて行った。

数日後、A児が「トマトが出来てる」と言って緑の小さい実を指差している。もしかしたらA児はこの日、はじめてこの実に気づいたのかもしれない。教師はA児が本当にこの実をトマトだと信じているのかな?と思い、「小さいけどトマト?」と聞き返した。A児は「トマトだよ。これから大きくなるで」と指で差して教えてくれた。A児と一緒に見ていたB児にもそのトマトが見えるようにしばらく指を差し続けていた。

雨続きで外へ出られず、久しぶりに園庭へ行った日のこと、「ピカピカトマトがなってる!」とC児。教師が「すごい!光ってる」と応える。二人の声にD児がやってくると「ここだよ、ここ!」と嬉しそうに言った。他児もどんどんやってきて、「小っちゃいのいっぱい」と言って嬉しそうだった。



考察

外へ植え替える前に保育室で苗を紹介した。4人ずつ座った子供たちは友達と押し合うこともなく、葉っぱに触れたり、顔を寄せて匂いを嗅いだり、落ち着いて苗を見ていた。でも、一人ではなく、友達と一緒に苗を囲んでいるので、お互いの声や表情、動きもよく感じられ、それが苗への興味を持続させたようだった。

…○興味をもつ

プランターに一本ずつ苗を植え、苗の生長と子供たちの遊び環境とのつながりを考え、配置を変えていった。子供たちは遊びながら、友達と一緒にトマトを見たり、水やりをしたりしていて、苗の変化が友達と関わるきっかけや状況を作っていた。

…○友達と関わる



“これから”を生きぬく力を育む「環境と暮らし」

ミニトマトとの関わり方は様々でしたが、友達がミニトマトを見ていると、たいてい誰かがやって来て、一緒に見始めたり、お喋りに加わったりしていました。

一人でも気づいたり考えたりしている子供たちですが、その思いが表出される時には、友達の存在が大きく関わっているように思います。何かを見つけたり、驚いたりした瞬間のつぶやきや笑い声に反応し、共鳴しあう姿に子供がもつ力の豊かさを感じます。子供たちが自らつながろうとする姿に学び、その力をのびのびと発揮できるような環境を作っていきたいと思います。

「キアゲハの幼虫」

暮らし
ポイント

「初めて飼育ケースで幼虫を飼う」 3歳児 II期

保育エピソード

A児、B児が、昆虫ゲージの中に幼虫を入れて保育室に持って帰ってきた。二人は「幼虫がいたんだよ!」「チョウチョになるで。アゲハの幼虫やと思う」と興奮して話している。まだ、捕まえた虫を飼育ケースで飼ったことはなかったのだが、二人があまりにも一生懸命だったので、「幼虫のお母さんは幼虫が大きくなるように幼虫の好きな葉っぱの所に卵を産むんだって」と話し、子供と一緒に幼虫がいた場所の葉っぱを取りに行った。保育室に戻り、葉っぱを入れた飼育ケースの中の幼虫をじっと見つめる二人。「幼虫さんご飯食べてる?」と聞くと「まだ…」とA児。「ご飯食べなかったらお腹が空いて大きくなれないと思うから、その時は逃がそう」と伝えた。二人は真剣な表情で話を聞き「そうやな、そうしよう」と応えた。

その日一日中、幼虫の様子を気にしていたA児が「先生、でっかいウンチしたよ、ご飯食べたのかな?」と言いにきた。見ると本当にウンチが転がっている。「大きいウンチだね、ご飯食べたのかな」と二人で喜んだ。

翌日、登園してくるなり、A児が「幼虫どうなった?」と聞いてきた。教師が「すごいよ、もう変身してるよ!」と応えると大急ぎで幼虫を見に行き、「色が変わってたよ」と教師に言う。B児も登園してすぐに幼虫を見に行き「変わってるね」と嬉しそうだった。友達と一緒にケースの中を覗き込み「クモの糸みたいなのが出てるね」と呟いていた。

次の日から飼育ケースの側にはらぺこあおむしの絵本と、チョウの科学絵本を置いておいた。B児は、絵本のチョウになったページを開いて「これになるの」と教師に繰り返し尋ね、「これになるんだよ」と友達に伝えていた。A児は毎日、科学絵本の写真とサナギを見比べ「いつチョウになるのかな?」「ここから羽出てくるんだよね?」と呟いていた。



考察

とても大きな幼虫を見つけたうれしさに大喜びだった。飼育ケースを手に入れた二人は、すぐに逃がさなくてもいいのだといううれしさと、飼うためにはエサをいれなくてはという幼児なりの責任感で、自分の話したいことを存分に話し、教師の言葉も真剣に聞いていた。

…○生き物として幼虫を見ている

A児もB児も幼虫がチョウになるということは知っていた。けれど、A児は写真で示されるサナギの変化が自分のサナギにも起きるのか思いを巡らせている。B児は絵本の中のサナギがチョウになったように、自分のサナギもチョウになるのだと不思議に思いつつも疑いなく信じて、教師や友達に話しかけている。

…○サナギの変身を楽しみにしている

いのち



“これから”を生きぬく力を育む「環境と暮らし」

今まで、捕まえた虫は、花や葉っぱを虫かごに入れ、2、3日後には逃がしていましたが、幼虫がチョウになるまでには時間がかかり、お世話についても考える必要があるので、今回は子供たちにチョウの生態の話をしました。このことを3歳児なりに真剣に受け止め、3歳児だからこそ「～その時は逃がそう」という言葉にも素直に頷いてくれたように感じました。幼虫は翌日にサナギになっていて、次はチョウになるということがリアルに感じられる体験になったと思います。

秋になり、「飼育」を意識した環境に保育室を変えたことが、子供たちの虫への思いを変化させたように思います。